

かしはら



かしはら

第168号

平成28年

紀元2676年

- 宮司あいさつ
- 「神皇正統記」と神武天皇
- 平成二十七年上半期祭典行事報告
- 行事予定他



宮司挨拶

平成二十八年丙申歳の新春を迎え、先ず以て御皇室の弥栄をお祈り申し上げます。

皆様方には平素より檀原神宮の諸祭事につきまして、格別なる御篤志をお寄せ頂いておりますこと、誠に有難く厚く御礼申し上げます。

扱、前々から申し上げております通り、本年は御祭神 神武天皇様が崩御あそばされましてより二千六百年の式年にあたりますので、例年齋行申し上げております四月三日の神武天皇祭を、「神武天皇二千六百年大祭」として御奉仕申し上げます。

ところで、皆様に二千六百年大祭の話を致しますと、「確か昔にありましたね」とか「紀元は二千六百年ですね」等々お言葉を頂きますが、皆様が想像される「二千六百年」は昭和十五年の「紀元二千六百年」であろうかと思われませんが、こちらは、神武天皇様が九州は高千穂宮を出立し六年の長い歳月をかけられ、国の中心である檀原に於いて即位され、檀原宮で日本の国を肇められたことをお祝いする事に由来しております。

この日は二月十一日の御例祭「紀元祭」の日となります。

「神武天皇二千六百年大祭」は神武天皇様が、「夫の畝傍山の東南檀原の地を觀れば、蓋し国の塊區か。治るべし。」と述べられたように、この美し国である檀原の地に皇居を営み、治世七十六年、檀原宮で崩御あそばされてから、数えて本年は二千六百年目となることを偲ぶ事に由来しております。

前回の「二千五百年祭」は大正四年と翌五年の二回齋行致しております。第五代桑原芳樹宮司の時代です。何故二年続けて二千五百年祭を齋行したかは不明ですが、大正四年は数えて計算し、翌五年は満で計算したものと思われます。因みに畝傍御陵では大正五年に齋行されています。

何分百年振りの祭典で御座いますので、当時を知る者も無く、僅かに残された資料によりのみしか、何うことが出来ません。しかしながら、次の百年後に齋行される「二千七百年祭」の手本と為るべく、現在職員一同諸事遺漏無きよう取り進めております。

最後に、本年も平素より当神宮を御崇敬頂いております皆様の御健勝と御多幸を心よりお祈り申し上げ、年頭の挨拶とさせていただきます。

檀原神宮宮司 久保田 昌孝

『神皇正統記』と神武天皇

皇學館大学教授 白山 芳太郎

北畠親房著『神皇正統記』における神武天皇に関する記述を見てみると、『古事記』『日本書紀』にあって『神皇正統記』にない部分と、『古事記』『日本書紀』は割愛しているが別な史料をもとに詳述している部分とがある。まず、前者より見ていきたい。

神武天皇について、これまで、国家の正史『日本書紀』に基づいて読まれることが多く、『古事記』神武天皇の段があまり読まれずに来た。たしかに事実の分析をしていくと、たとえば『古事記』の神武東征が終わりに近づいたころの記載に、生死をともしてきた兵士から、新しいおきさきと九州から随行してこられたおきさきとどちらがお好きですかと問われた歌への返歌がある。どういふ場面でのように詠まれたかという事実関係となると『日本書紀』に詳しく書かれている。それを読まなければ明瞭ではない。『古事記』の記述は断片的であり、欠点と言えば欠点である。しかし同書は、ローアングルな視線が特色で、全体を通じて、つつましい生活ぶり、暮らしの中に生きる信仰、生きとし生けるものとの共感、心が洗われるようなすがすがしさ、ことだまそのもののような神話、そういつたものが詰まっている。『日本書紀』にもそう言った個所はあるが、同書は概して海外に向かって書かれている。大陸に向けて国家の存立を

示すことが目的であった。古い時代の中国の文献には日本のことを「倭人」とか「倭種」と書いていて、一国とは見なしていない。百余国に分かれているとも書いている。七世紀の遣隋使が派遣される頃になっても『隋書』は日本のことを「倭国」と呼んでいる。そういう状況を打破し「倭」とされてきた我国を「日本」と呼ばせることに主眼を置いて書いているのが『日本書紀』である。したがって『隋書』の次の『唐書』になって初めて「日本」と呼ばれることとなる。これは『日本書紀』を示すことによつて発生した変化である。遣唐外交団の努力とともに、同書の提示が不可欠であった。それによつて我国への呼び名の変化が生じたのである。『古事記』にはそういう狙いはなく、筆録者の太安万侶は同書を日本人向けに書いている。安万侶自身、すでに分からなくなっている話、その時すでに千年以上たつていて、いわばおとぎ話のようなものまで含まれている。そういうものを語ることを通じて、日本人の精神性を残そうとしたのである。

太安万侶は、たとえばイザナギノミコトとともに歩き、共に逃げ、ともにものを投げて、現在進行形で語っている。スサノオノミコトにしてもそうである。読者はともに歩き、共に寝て、ともに走って、知ることができるのである。それが『古事記』である。そこで神武天皇以前



の神代の巻に、全体の三分の二をかけて書いている。十五分の一の比率で神代を語る『日本書紀』とは立場を異にしている。『日本書紀』における神代の巻は上下二巻である。家々による微細な伝承の違いを残したことによって二巻になっているのであって、本文としては『古事記』とほぼ同一の量である。家々による伝承の違いを残した『日本書紀』は、その点は長所であるが、話の筋を一本化した『古事記』の神代の巻は不備かという点で、そうとばかりはいえない。明快という点では長所である。『日本書紀』ですら、神武天皇以降、家々による伝承の違いを記すことをやめてしまっている。簡潔に記すと言う図書としての本分を『日本書紀』も承知していたのである。しかし、さまざまな執筆材料を収集した編纂の労苦を残そうとして『日本書紀』は本文の末尾に細字で割注にして「二書に曰く」を付記したのである。現行本の『日本書紀』は家々による伝承の違いを重視し、そのような注の部分まで大きく書いたため、複雑そうに見えるのであって、編者としては一見して分かるように工夫している。また『古事記』は外国との交流関係の記事が嫌いである。例えば仏教の伝来を記さない。逆に『日本書紀』は外国との交流関係に重きを置いている。『古事記』における最大の比重は、皇位継承の順位をめぐる血のつながった者どうしが殺し合い、その他、残酷なことがあつて、それを克服して今があるということであつて、これからはそういうことをなさないでいただきたいと願

う思いで書いているのである。そういう態度について、皇室を美化する為に書いたという先入観で読まれてきたため、こういった箇所が読み飛ばされてしまったのである。そうなるってしまった原因は前段に神話があることにあるかもしれない。おとぎ話のようなことが書かれていて『古事記』の最初の三分の二がそれである。それを読み切つて、そこから先、初代として美化された神武天皇があるにちがいないという先入観で読まれてきたのである。それを読み終わると、そのあとに欠史八代、つまり足跡のない八代があると断じてきたが、伝えた人間の責任で欠落したのであって、そこに創作を加えていないことを褒めるべきである。それを、歴史編纂官の過失あるいは謀略のように誤読し、「欠史八代」という読み方がなされてきたのである。つまり第二代以降八代は実在しないものを謀略で加えた誤解されてきたのである。実際の『古事記』は神武天皇から本番である。神武天皇が皇位に就かれる前、御長兄が敵に殺される。御次兄とその次の兄君も事故死。そこで四男である神武天皇があとを受けて東征を完成され御即位となる。さらに、このような初代が崩御されると、跡目相続をめぐって事件が起きる。御長男が神武天皇の最初のおきさきの御子であつて、第二代綏靖天皇およびその兄で太安万侶の祖先は二人目のおきさきの御子である。綏靖天皇たち御兄弟の御生母が異母兄に略奪結婚されてしまうという事態なのである。そして兄は弟たちを殺

害しようとする。母君が歌を詠んで、我が子に危険を知らせられる。そこで御次男以下が御長兄の殺害計画を立てられる。太安万侶の祖先は兄であったが手が震えて殺すことができない。弟である綏靖天皇が、兄から刀を奪って手を下される。そして、御兄は、御弟に御位を譲られる。意富（おほ）氏、つまり太安万侶の祖先はそのような譲った兄の子孫であった。そういったことに重点を置き、今後、こういう争いを避けていただきたいという思いで書いている。それが『古事記』である。

太安万侶が生きた時代は、天武天皇に味方した「壬申の功臣」たちの時代でもあった。『日本書紀』はそのことを詳細に記している。『古事記』は壬申の乱は書けない。その手前で筆を擱いている。叔父と甥が争われた壬申の乱を『古事記』は書けないのである。繊細で思いやりと人情のある太安万侶らしいところである。われわれも安万侶と一緒にあって、互いにしゃがんで、ローアングルで目線を共有すべきなのである。『神皇正統記』はそういう『古事記』『日本書紀』共通して記す神武天皇崩後の綏靖天皇御即位のいきさつを記さない。ところが『先代旧辞本紀』はニギハヤヒノミコト帰順のいきさつを詳細に記していて『神皇正統記』はそれを採択するのである。これは物部氏の伝承であって、今日ではあまり読まれないが、ニギハヤヒノミコトを奉じる勢力がニギノミコトの子孫である神武天皇に帰順したことについて記したものである。その点を『古事記』『日本書紀』は簡

単にしか触れない。そのようなニギハヤヒノミコトを奉じる勢力、つまり後の物部氏の功績を『神皇正統記』は高く評価するのである。



白山 芳太郎（プロフィール）

昭和二十五年神戸市生まれ。文学博士。四天王寺女子大学講師、国学院大学講師、東北大学講師などを経て、現在、皇學館大学教授（日本宗教学会理事、日本思想史学会評議員）。

おもな著書

『職原鈔の基礎的研究』臨川書店、
『北畠親房の研究』ペリかん社、
『日本思想史辞典』ペリかん社、
『日本人のこころ』エス・ピー・シー、
『日本神さま事典』大法輪閣、
『仏教と出会った日本』法藏館、
『王権と神祇』思文閣出版、
『神道』国書刊行会、
『神道説の発生と伊勢神道』国書刊行会、
『神道学原論』皇学館大学出版部
など。

修理報告 檜皮葺工事

平成二十六年十月二十九日に本殿屋根工事業に先立って仮殿遷座祭が齋行されました。

前回の昭和五十一年から約四十年を経過した檜皮葺屋根の解体工事が今年二月十八日より開始、三月末に終了しました。

次に、箱棟の解体、屋根軒付補修と野地板の修理作業が始まり檜皮の下に隠れてはいましたが、野地板が傷んでいる所も多くあり、それらを新しく取替を致しました。

その後、檜皮の平葺き作業が本格的に開始。

奈良県産と岐阜県産の長さ約七十センチ・巾約十センチの檜皮約二十八万枚を専門の職人が一枚一枚竹釘で打ち付けて屋根を葺いていきました。

職人によると屋根葺き作業で一番難しい所は、屋根の角の曲線の葺替えて、その場所は熟練の職人の技量の見せ所だそうです。

九月二日現在、檜皮の葺替えは概ね終了し、後は修理した屋根の鬼板と箱棟を設置することとなります。

今後、本殿内部の修理、内陣の調度品の調製、本殿金具の修繕を進めて参ります。

祭典行事報告

平成二十七年二月〜八月

二月十一日 紀元祭(例祭) 写真①

御祭神である第一代天皇 神武天皇様の御即位を讃え、国家の平安を祈願する紀元祭が齋行されました。

本年は御勅使として掌典 堤公長様を御差遣頂き全国より約四千名の崇敬者の御参列のもと厳粛且つ盛大に執り行われました。

二月十七日 祈年祭

五穀豊穡、皇室の安泰、国民の安寧を祈願する祈年祭が齋行されました。

三月十二日 長山稲荷社 初午祭 写真②

三月二十二日 春季皇霊祭 遥拝

四月二日 御鎮座記念祭

明治二十三年四月二日に檀原神宮が御鎮座された事を記念して、午前十時より祭典が齋行されました。

四月三日 神武天皇祭 写真③

御祭神 神武天皇様の偉業を讃える祭典で、午前十時より齋行されました。祭典では宮司祝詞奏上の後、昭和天皇様の御製に元宮内省楽長 多忠朝氏が作舞・作曲された「浦安の舞」が奉奏されました。

祭典終了後、引き続き外院の齋庭にて、奉納の儀が行われ、檀原市民踊・舞踊の会(総勢三十名)の皆様による檀原音頭が披露されました。午後より生憎の雨模様となりましたが、内拝殿にて



④昭和祭



③神武天皇祭



②長山稲荷社 初午祭



①紀元祭

國栖奏、並びに各種奉納行事が執り行われ終日賑わいを見せました。

■ 四月二十二日 下種奉告祭

■ 四月二十九日 昭和祭 写真④

昭和天皇様の御聖徳を讃え、皇室の弥栄と国の隆昌、世界の平和を御神前に祈念し、御神徳を仰ぎ奉る昭和祭が齋行され、内庭では御祭神と縁の深い久米舞が奏納されました。約二百名の御参列がありました。

■ 五月二日 長山稲荷社例祭

■ 五月五日 有楽流献茶祭

午前十時より有楽流十七代 家元 織田宗裕宗匠の御奉仕による献茶祭が齋行され、濃茶と薄茶の二碗を御神前にお供え頂きました。祭典後引続き境内の貴賓館、文華殿ではお茶席が設けられ、参拝者にもお茶がふるまわれました。

■ 六月十七日 御田植祭

下種奉告祭で蒔かれた種が苗となり、三人の耕作者が田植えをし、一年の五穀豊穡が祈られました。

■ 六月三十日 夏越大祓 写真⑥

知らず知らずのうちに犯した半年間の罪穢れを祓い清める神事です。今年も南神門前広場に祭場を設け齋行されました。神職と参列者は「大祓詞」を奏上し、人形に罪穢れを移して無病息災を祈願いたしました。

■ 七月一日 夏越神楽祈禱

前日の夏越大祓で祓い清められた身の残り半年間の無病息災、

家運隆昌を神楽殿にて祈願をいたしました。

■ 七月二十五日～二十八日 神楽講習会 写真⑥

神社音楽協会の先崎徑子先生をお迎えして、檀原神宮会館に於いて七月二十五日から二十八日までの四日間、恒例の神楽講習会が開催されました。檀原神宮の神楽舞である「扇舞」「柵舞」「鈴舞」と「浦安の舞」を正しい形で舞えるよう、先生から指導を受け、巫女達は美しい舞、神様の心を和ませる舞を舞う為に熱心に研鑽を積んでいました。

■ 八月一日～五日 林間学園 写真⑦

小学三年生から六年生まで、檀原市の児童を中心に県内より一五二名の参加を得て開催されました。戦後の昭和二十五年に始まり今年で六十六回目を数えます。専門講師約四十人の指導で科習や歴史、図工、音楽を学び、畝傍山登山やスポーツなどの総合学習を行いました。最終日には神宮会館で閉園式、音楽教室の学習発表会、檀原神宮子供会（紙芝居鑑賞など）の行事があり、また、科学歴史・図工教室の作品を神宮会館ロビーに展示いたしました。

■ 八月十七日～二十三日

■ 國學院大學 皇學館大學 指定神社実習 写真⑧

檀原神宮では、毎年夏に東京の國學院大學と伊勢の皇學館大學の神職資格取得を目指す学生の為の神社実習を受入っております。本年は両大学合わせて九名の学生を受入しました。卒業後神職となる学生達は、神道についての座学や、祭典奉仕、禊行法の指導を受け、研鑽を積みました。



⑧指定神社実習



⑦林間学園



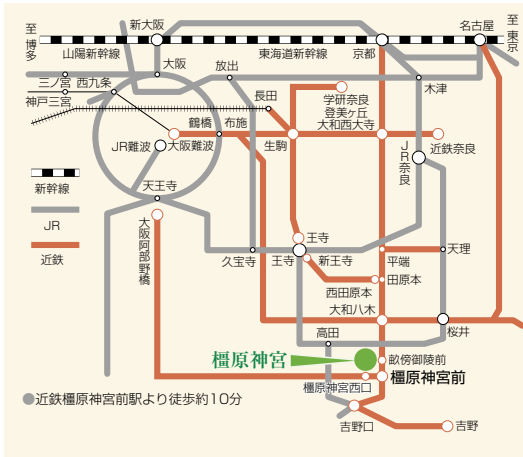
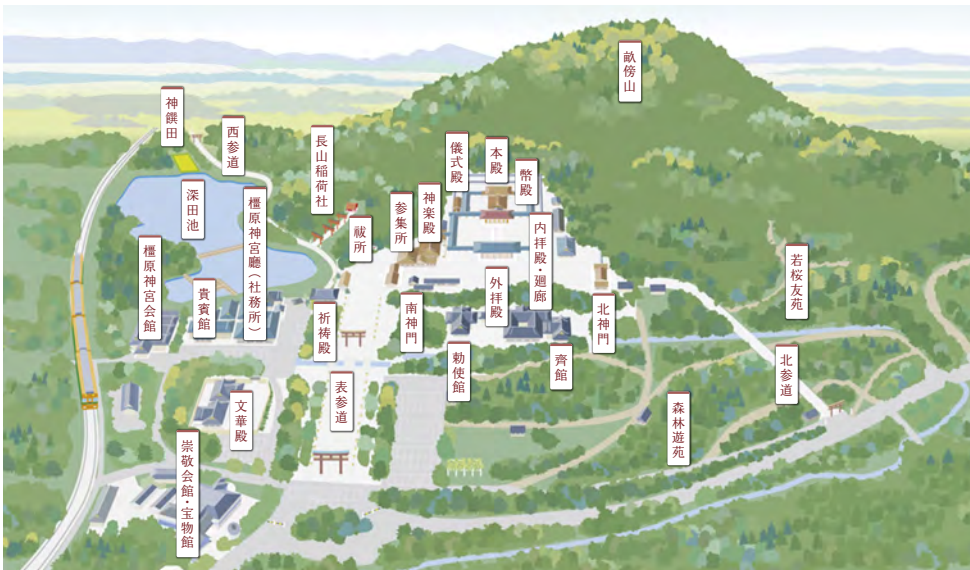
⑥神楽講習会



⑤夏越大祓

平成二十八年行事予定(一月～四月)

- 一月一日 歳旦祭
- 一月一日～七日 新春初祈禱
- 一月二日 長山稲荷社歳旦祭
- 一月三日 元始祭
- 一月五日 書初め大会(奈良)
- 一月六日 書初め大会(大阪)
- 一月七日 昭和天皇祭遙拝
- 一月中旬 神武講社新穀奉獻感謝祭
- 一月下旬 書初め大会 表彰式
- 二月十一日 紀元祭
- 二月十七日 祈年祭
- 三月中 本殿遷座祭
- 三月一日 長山稲荷社初午祭
- 三月二十日 春季皇霊祭遙拝
- 四月三日 神武天皇二千六百年大祭



ブログ
「榎原だより」を開設
 榎原神宮の日々を綴った「榎原だより」を開設いたしました。
 神職、巫女などそれぞれの視点から、祭事だけではなく四季折々の榎原神宮を御案内致します。
 季節によって変化する榎原神宮の風景をより多くの方々に知って頂けたらと思います。
 是非御覧ください。

<http://www.kashiharajingu.or.jp/dayori>